

# William Faulkner の *The Hamlet* に基づく Cormac McCarthy の *Child of God* ——James Franco による映画版の是非

大地 真介

## 1. *Child of God* と Faulkner の諸作品

アメリカの文学研究の重鎮 Harold Bloom は、今日のアメリカ文学を代表する小説として Thomas Pynchon、Philip Roth、Don DeLillo と共に Cormac McCarthy の作品を挙げており (1)、近年 McCarthy はアメリカで最もノーベル賞に近い作家の一人とされている (Garner)。その McCarthy は、William Faulkner を代表とするアメリカ南部の作家たちが紡いできた南部ゴシックの流れをくむ作家であり (Hage 150-51)、多くの作品で陰惨な南部を描く。John Burt は、Faulkner の影響を最も受けた南部作家は McCarthy かもしれないと述べており (317)、実際、Faulkner と同じく南部で育ち成人してからも長年南部に居住した McCarthy の作品と Faulkner の作品の類似点は数多く指摘されている。McCarthy の作品の「登場人物 (貧乏白人<sup>ブア・ホワイト</sup>、貧農、旧家の末裔) や出来事 (近親相姦、殺人、南部貴族の若者の自虐的な悲しみ)」は Faulkner の作品を彷彿させるし (Wilson 360)、また、文体においても、息の長い文章やイタリック体の多用、会話文における引用符の不使用など Faulkner の影響が容易に見て取れる (Frye 153)。

本論文で扱う *Child of God* は、1973 年に発表された McCarthy の三つ目の長編小説であり、実際に起きた二つの事件、すなわち南部に住む窃視症の James Blevins が、車中で情交におよんだ男女を殺害した罪に問われた Lula 湖殺人事件と、Alfred Hitchcock の映画 *Psych* の原作のモデルとなった連続殺人犯にして死体愛好者の Ed Gein の事件にヒントを得て書かれたと言われている (Luce 138-46)。*Child of God* は、主人公が異様な行動をとるため出版当初は批評家からあまり評価されず売れ行きも芳しくなかったが (Shearer-Creman 53; Juge 20)、今日では *Suttree* (1979) や *Blood Meridian or the Evening Redness in the West* (1985) と共に McCarthy の代表作の一つとされる (Josyph 205)。

Erik Hage は、Faulkner の影響が非常に明瞭に表れている McCarthy の作品として彼の処女長編の *The Orchard Keeper* (1965) を挙げ (97)、また、Brian Evenson は、McCarthy の長編二作目の *Suttree* が “the most overtly Faulknerian of all of McCarthy’s novels” であると述べているが (62)、*Child of God* も Faulkner の影響が極めて濃厚な作品である。まず、Dianne C. Luce も指摘しているように (146)、主人公が殺人を犯したうえで死体を保持

して同衾し、最終的に死体がミイラの状態で見られるという点で本作品は Faulkner の “A Rose for Emily” (1930) と一致している。また、Luce は言及していないが、主人公が税金の滞納で町の人々とトラブルを起こす点、父親が死んでから主人公が「気が狂った」とされる点でも (*Child* 21-22)、“A Rose for Emily”の影響がうかがえる。<sup>1</sup>

Kenneth Lincoln は、死体を運ぶ気味の悪い物語である点で *Child of God* は Faulkner の *As I Lay Dying* (1930) を彷彿させると述べ (52)、Amy Hungerford は、*Child of God* は、物語構造も *As I Lay Dying* によく似ていると指摘する (89)。Lincoln も Hungerford も触れていないが、*Child of God* の主人公 Lester Ballard は、*As I Lay Dying* の主人公の一人 Darl Bundren と同様、他人の建物を燃やしており、作品の最後では精神病院に入れられる。また、Darl も Ballard も、洪水の際、豚のふくらんだ死体が流れてくる濁った川を渡ろうとするが、丸太がぶつかってきたため溺れて持ち物が流されている (*As I Lay Dying* 97-98, 104; *Child* 155-56)。

Chad M. Jewett は、Faulkner の *Sanctuary* (1931) と同じく *Child of God* は、ギリシャ神話の冥界の王 Hades による大地母神 Demeter の娘 Persephone の拉致とレイプの物語をアイロニカルに反映していると指摘する (78-93)。*Sanctuary* と *Child of God* の類似点をさらに指摘すると、首を切って人を殺した黒人が拘置所で繰り返し歌を歌うエピソードと父親が原因で重度の障害を持って生まれた頭髪のない子供が鳥を虐待するエピソードが両作品で登場している (*Sanctuary* 392-93; *Child* 77, 115-17)。

上記の小説以外の Faulkner の作品と *Child of God* のつながりについて言えば、*Child of God* の主人公 Ballard は、Faulkner の *If I Forget Thee, Jerusalem* (1939) の主人公の一人「背の高い囚人」と同様、大洪水に遭遇し、また、自由の身になるもわざわざ逮捕されるために戻る。さらに、Faulkner の “Dry September” (1931) の Will Mayes と同じく Ballard は、夜 Ballard をリンチしようとする大勢の男たちに無理やり車の後部座席の真ん中に座らされ、未舗装の道の先の人気のない建物に連れて行かれている。

以上、*Child of God* が Faulkner の作品の影響を色濃く受けていることを確認したが、次節で詳しく説明するように、*Child of God* は、作品の一部を借用しただけの上記の Faulkner の諸作品の場合と異なり、Faulkner の *The Hamlet* (1940) の Mink Snopes の物語全体をあらかじめ作品の基盤に据えている。このことをこれまで批評家が誰も指摘していないのは、*Child of God* 執筆の際のヒントになった実際に起きた殺人事件や “A Rose for Emily”、*As I Lay Dying*、*Sanctuary* といった Faulkner の他の過激な作品に目を奪われたためだと考えられる。本論文では、*Child of God* が Faulkner の代表作の一つ *The Hamlet* を下敷きにして作成されていることを論証し、それを踏まえて、2013 年の James Franco

による *Child of God* の映画化が成功しているかどうかを詳細に検討していきたい。

## 2. Lester Ballard と *The Hamlet* の Mink Snopes の類似性

本節では、*Child of God* の主人公 Ballard が Faulkner の *The Hamlet* の Mink Snopes に基づいて造形されていることを詳しく説明していく。*Child of God* の大筋は、Mink の物語のそれとぴったり一致しており、土地を持たず小柄で「やせている」南部の貧乏白人が (*Hamlet* 974; *Child* 104, 192)、困窮の果てに、自分の所有物を実質的に奪った相手——前者では John Greer、後者では Jack Houston——を恨んで不意を衝いて銃撃し逮捕されるというものである。Mink の物語は Faulkner が 1931 年に発表した “The Hound” という短編小説を基にしており、そのタイトルが強調するように Mink は、猟犬の声を繰り返し耳にし、また、猟犬を蹴ったり殴ったりして暴力をふるうが、Ballard も同じことをしている (*Hamlet* 969; *Child* 23-24, 41, 189)。さらに、Mink も Ballard も拘置所に入れられた際、歌を歌う黒人の囚人に会う。また、二人とも、ロープを使って苦勞して隠した死体を再び苦勞して運び出すなど死体の処理に奮闘している。<sup>2</sup>

さらに、Ballard の祖父 Leland Ballard は、Mink の親族の Ab Snopes と同様、貧乏白人であり、南北戦争中に戦いもせず盗みを働いていた (*Hamlet* 756; *Child* 80)。Leland が、家にやってきた北軍の軍曹の鞍からこっそり皮を切り取って靴の半底に使ったというエピソードは、彼が貧乏白人であることを示している。Leland について、“No, I don’t know how he [Leland] got that pension. Lied to em, I reckon. Sevier County put more men in the Union Army than it had registered voters but he wasn’t one of em. He was just the only one had brass enough to ast for a pension” (81) と言われており、その金を使って Leland は土地を購入したと考えられ、その土地を Ballard が税金滞納により没収されたのである。

また、貧乏白人として虐げられて殺人を犯した Mink の心の闇を表すように Mink の物語にはくどいほど “darkness”、“dark”、“black” という表現が登場するが (*Hamlet* 934, 937, 938, 939, 940, 943, 945, 946, 947, 948, 951, 952, 953, 957, 958, 959, 963, 965, 966, 968, 970)、*Child of God* においても、それを構成する数多くの節のうちほとんどの節で “darkness”、“dark”、“black” といった表現が登場しており、“Were there darker provinces of night he [Ballard] would have found them” (23) という描写や、Ballard が初めて登場する次の場面も示すように、Ballard は闇や黒と結びつき、その闇や黒は、Mink の場合と同様、社会的に虐げられて暴力的になった Ballard の心の闇を象徴している。

To watch these things issuing from the otherwise mute pastoral morning is a man at the barn

door. He is small, unclean, unshaven. He moves in the dry chaff among the dust and slats of sunlight with a constrained truculence. Saxon and Celtic bloods. A child of God much like yourself perhaps. Wasps pass through the laddered light from the barnslats in a succession of strobic moments, gold and trembling between black and black, like fireflies in the serried upper gloom. The man stands straddlelegged, has made in the dark humus a darker pool wherein swirls a pale foam with bits of straw. (4)

以上論じてきたように、*Child of God* はあからさまに *The Hamlet* の Mink の物語を下敷きにして作成されているが、このことは、Mink の物語と同様、*Child of God* の主要なテーマが南部の貧乏白人<sup>フア・ホワイト</sup>の悲哀であることを示している。*Child of God* は、McCarthy のそれまでの小説の特徴だった文体的な過剰さを排しており (Giles 129)、社会的背景をほとんど語っていない。しかしながら、Ballard の貧乏白人<sup>フア・ホワイト</sup>的な要素はきちんと描かれており、土地を所有せず「やせている」Ballard は、「不潔で髭も剃らず」、底がはがれかけた靴を履き (46)、常に困窮しているのである。

ただし、McCarthy は、単に Faulkner の *The Hamlet* の Mink の物語を下敷きにしただけでなく、同物語の貧乏白人<sup>フア・ホワイト</sup>の悲哀というテーマをさらに推し進めており、Ballard の人生は Mink より一層悲惨である。Ballard は、当初は Mink と同じく他人のあばら屋に住んでいたが、結局そこにも住めなくなって洞窟に住んでいる。さらに、妻子も親族もいる Mink と違って Ballard は天涯孤独の身である。Mink は売春婦を妻とするが、Ballard は、売春婦のように誰とでも関係を持つ娘たちからも、本物の売春婦からも相手にされない。Mink の元売春婦の妻は、彼に悪態をついて殴られるも、彼が殺人の罪で告訴されないように奮闘するが、一方、Ballard が助けようとしているにもかかわらず彼に悪態をついて石を投げ殴られた売春婦は、彼を告訴するのみならず殴ったり蹴ったりする。このように、Ballard は、同じ貧乏白人<sup>フア・ホワイト</sup>の Mink よりも更に悲惨な人物として描かれているのである。

### 3. 映画版 *Child of God* と原作の違い

*Child of God* を映画化した James Franco は、テレビ映画 *James Dean* (2001) での演技が高く評価されてゴールデン・グローブ賞に輝き、Sam Raimi 監督の *Spider-Man* 三部作 (2002, 2004, 2007) に出演して人気を得た今日ハリウッドを代表する俳優の一人だが、彼を異色たらしめているのは、UCLA で学士号をコロンビア大学で修士号を取得し UCLA などで教壇に立つ知識人でもあるということである。Franco は、2010 年に自作の

脚本を自ら監督した “The Feast of Stephen” でベルリン国際映画祭短編映画最優秀賞を受賞している。また、Franco は、アメリカを代表する純文学作品のいくつかを監督として映画化しており、2013 年に Faulkner の *As I Lay Dying* を、同年に McCarthy の *Child of God* を、翌年には Faulkner の *The Sound and the Fury* (1929) を映画化し、2015 年には Steve Erickson の *Zeroville* (2007) を映画化する予定である。

Franco による *Child of God* の映画版は、2013 年にヴェネチア国際映画祭で発表され、2014 年に一般公開されたばかりである。主演は Scott Haze、共演は Tim Blake Nelson や Jim Parrack であり、Franco は監督と脚本を担当するだけでなく出演もしている。本作品により、Franco はヴェネチア国際映画祭金獅子賞とニューヨーク映画祭グラン・マルニエ協会賞にノミネートされ、主演の Haze はハンプトンズ国際映画祭で新進俳優賞に輝いた。

*Child of God* の映画版からは、Franco が原作にできるだけ忠実に映画化しようとしたことが伝わってくるが、それでも変更点は数多く存在する。McCarthy の *Child of God* が傑作とされている以上、Franco による *Child of God* の映画化の是非を問うにあたって注目すべきは、これらの変更点であることは言うまでもない。まず本節では、大きな変更点のうち許容しうるものを確認していきたい。

Franco は、原作では小柄である Ballard の役に長身の Scott Haze を起用しているが、映画の成功の一部は役者にかかっているため、演技力を重視して Haze に Ballard を演じさせたのは許されることであろう。また、原作において、入院中の Ballard をリンチしに来た男たちが部屋に入って来るなり彼に、“[Where]’s them bodies at. . . How many people did you kill?” (177) と尋ねる場面は、映画では、それぞれ Tim Blake Nelson と Jim Parrack が演じる保安官と保安官補が尋問する場面に置き換えられているが、これは、知名度の高い Nelson と Parrack の見せ場を増やしたということで理解できる変更である。

原作と異なり映画版では、Ballard が最初に遺体と添い寝する際、ズボンを脱いでいないし、遺体を全裸にすることもしていない。また、原作では、彼は、夜小型トラックで男と抱き合っていた女性の “the base of her skull” (151) を銃で撃つが、映画では首の付け根を撃っている。ただし、これらの原作の Ballard の行為は視覚的に表現しようとするに極めて過激なものになってしまうため抑えた描写にしたと考えられ、問題のない変更だといえる。

また、あばら屋が焼け落ちた際 Ballard が残骸の中で遺骨を探して真っ黒になるエピソード、Ballard が撃った小型トラックの男が生きていて後に逃げ出し、それを Ballard が追いかけるエピソードなどが映画版では削られているが、映画の場合、時間的な制約が

あるため、原作のすべてのエピソードを描ききれなくても仕方がない。William Giralдиは、次のように、Franco が原作の大洪水の場面を削ったことを非難しているが、この削除についても映画の時間的制約を考慮すべきであろう。

Franco has also excised the essential flood scene, the town submerged after a punishing rain—an intimation of divine reprisal, a plague upon these people for the transgressions of mankind. “I never knew such a place for meanness,” a woman says of her inundated town. McCarthy speaks of this locale as a “fabled waste,” but Franco’s realist, too-simplistic rendition denies the narrative this fabled and mythic register, and in doing so neuters much of the novel’s potency.

原作の大洪水の場面は確かに重要だが、時間的制約があること、そして “ultra low-budget” (Hoffman) での映画製作だったことを勘案すれば、大洪水の場面の削除を Franco の「単純すぎる表現」のせいにするのは酷というものである。さらに、原作と違って映画版では、酒の密売人 Fred Kirby も廃品処理屋 Reubel も登場せず、また、Reubel の娘や孫も登場せず、したがって Ballard が後者の二人を殺害する話もないが、これも時間と予算の制約で幾分仕方がない変更だといえる。

#### 4. *Child of God* の映画版の問題点

前節では、映画版 *Child of God* と原作の違いで許容しうるものを確認したが、本節では、原作からの変更で問題があるものを指摘したい。まず、映画版と違って原作では、冒頭の土地の競売の場面で、Ballard は、John Greer と言い争っておらず、また、Greer ではなく Buster に殴られている。このような違いが生じたのは、Ballard が最終的に Greer に腕を撃たれたことを指す “He [Ballard] didn’t look so pretty hisself when Greer got done with him” (22) という原作のセリフを冒頭の場面を指すものと Franco が勘違いしたためだと考えられる。後に Greer は、Ballard に出くわし、“You’re Ballard, ain’t ye?” と Ballard に質問しているが、Ballard の土地の競売で Ballard と言い争って斧で殴り倒しておきながら、このような質問するのは不自然であり、この変更は問題だといえる。

また、映画版では、拘置所で Ballard と一緒になった黒人の囚人が彼に罪状を尋ねられるが聞き取れず、困惑して “What? What you say?” と聞き返すが、このセリフは原作にはない。このことに代表されるように、映画版では Ballard は発話障害があり、少し知的障害もあるように描かれている。Ballard が、虎と熊のぬいぐるみが彼に対して陰謀を企て

ていると主張し、鼻水を垂らしながら怒り狂ってぬいぐるみを連続して銃で撃つ場面も原作には存在しないが、この場面も、Ballard に知的障害があることを示す働きをしている。つまり、映画版では、Ballard は知的障害があるがゆえに罪を犯したということになってしまっており、*Child of God* のタイトルと直結する “[Ballard is a] child of God much like yourself perhaps” という原作の文章とかみ合っていない。というのも、本論文の第2節で指摘したように *Child of God* の主要なテーマは貧乏白人<sup>ブア・ホワイト</sup>の悲哀であり、この文章は、Ballard のように社会的弱者として虐げられて悲惨な極限状態に置かれた場合われわれ一般人も彼のように罪を犯すかもしれないということを暗示しているからである。

*Child of God* の主要テーマが貧乏白人<sup>ブア・ホワイト</sup>の悲哀であることをきちんと踏まえていない映画版の描写は他にもいくつかある。第2節で述べたように Ballard の祖父 Leland は貧乏白人<sup>ブア・ホワイト</sup>であるため、Ballard が相続した土地や家も立派なものであるはずがなく、競売人も、土地を手入れする必要があることを認めており (6)、また、家が二階建てだということ示す記述もないにもかかわらず、映画版では、Ballard がかつて住んでいた家は小ざれいな土地に建つ二階建ての大邸宅である。また、原作では、洞窟暮らしをする Ballard が、「恐ろしく寒い冬」(134) で飢えるも、Fox の店で付けで買うことに苦情を言われたため、仕方なく Greer の鶏小屋から鶏のエサのトウモロコシと鶏と卵を盗んでいるが、映画版では、まだ洞窟暮らしをしていない時期の Ballard が Greer の鶏を盗もうとして手間取る様がコミカルな音楽を背景に喜劇的に描かれている。さらに、原作では、リンチをされないために洞窟の奥に逃れた Ballard は、人目につかないように日没を待って洞窟から出るが、映画版では真昼間に洞窟から出て大笑いする。そこで映画は終わっており、Ballard が病院に戻り、精神病院に入れられ、肺炎で死に、Ballard が隠していた多くの死体が見つかって運び出されるという原作の話がすべて削除されている。つまり、Ballard が自由になってハッピー・エンディングになっているが、これも貧乏白人<sup>ブア・ホワイト</sup>の悲哀のテーマと整合性が取れていない。

また、Justin Chang は、次のように映画の撮影と音楽を褒めているが、的外れだと思われる。

And that artistry is considerable. Lenser and regular Franco collaborator Christina Voros shoots on a muted color palette of dull grays and mud browns, and there's a rough-hewn poetry to some of the images framing Ballard against a haggard wintry landscape. Curtiss Clayton's jumpy editing is of a piece with the film's unadorned aesthetic, and composer Embry's country stylings complement the story's shifting mood by turning increasingly,

memorably somber in the second half.

まず、「くすんだ灰色と泥のような茶色の柔らかな色調」が高く評価されているが、本論文の第2節で指摘したように、原作では、それを構成する数多くの節のうちほとんどの節で黒か闇が登場し、それらは、社会的に虐げられた Ballard の心の闇を象徴しているもので、映画の基調となる色は黒や濃紺にするべきところである。そして、音楽は「作品の後半でだんだん顕著に暗く」なっているとあるが、Ballard が一種の復讐で Greer を銃撃するクライマックスでコミカルな音楽が流れており、これも原作の主要テーマとかみ合っていない。

James Franco が、アメリカを代表する純文学作品を次々と映画化している点は大いに評価できるし、また、*Child of God* の出演者の演技も優れており、特に Ballard を演じた Scott Haze は、原作の舞台のテネシー州の洞窟で寒い季節に3か月間一人で暮らしたのち撮影に臨んだ成果が表れた熱演であった (Barry)。しかしながら、先述したように Franco は、Ballard に知的障害があるように描いており、Faulkner の代表作の一つ *The Hamlet* の Mink の物語と同じく *Child of God* の主要なテーマが貧乏白人<sup>フア・ホワイト</sup>の悲哀であることをしっかり踏まえていない (Franco は *Child of God* の映画化の直前に Faulkner の貧乏白人<sup>フア・ホワイト</sup>の物語 *As I Lay Dying* を映画化しているにもかかわらず)。したがって、Franco による *Child of God* の映画版は、残念ながら失敗作と言わざるを得ない。小説を映画化する場合、時間や予算の制約によって原作の内容を幾らか改変するのは致し方のないことであるが、その小説が傑作とされているならば、少なくともその主要テーマはきちんと再現しなければならないのである。それをしないのであれば、小説家が苦勞して書いた物語を好き勝手に改変するようなことはせず、オリジナルの脚本で映画を撮るべきだといえる。

## 注

1 *Child of God* の主人公 Lester Ballard は土地を没収されるが、その原因は税金の滞納だと考えられている (Grammer 38)。また、“A Rose for Emily”の主人公 Emily Grierson の父親が死んだ際、“We did not say she [Emily] was crazy then” (124) とされているが、逆に言えば、「我々」は、Emily は父親が死んだとき気が狂っていたと後になって思ったのである。

2 なお、*The Hamlet* が第一作である Snopes 三部作の最後を飾る *The Mansion* (1959) でも Mink の物語が登場しており、同作品では、Ballard と同じく Mink は、他人のため



に重労働の柵作りをしたり、「気が狂っている」と人から言われたり（372）、女装したりしている。

## 引用文献

- Barry, Colleen. “*Child of God* Star Scott Haze Slept in Caves to Prepare for Role, Says Director James Franco.” *Huffpost Entertainment*, 31 Oct. 2013. Web. 20 Jan. 2015.
- Bloom, Harold, ed. *Cormac McCarthy*. 2nd ed. New York: Bloom’s Library Criticism, 2009.
- Burt, John. “After the Southern Renaissance.” *The Cambridge History of American Literature*. Ed. Sacvan Bercovitch. Vol. 7. Cambridge: Cambridge UP, 1999. 311-424.
- Chang, Justin. “An Extremely Faithful, Suitably Raw but Still Relatively Hemmed-in Adaptation of Cormac McCarthy’s Chilling 1973 Novel.” Rev. of *Child of God*, dir. James Franco. *Variety*, 31 Aug. 2013. Web. 20 Jan. 2015.
- Cremean, David N., ed. *Critical Insights: Cormac McCarthy*. Ipswich: Salem, 2013.
- Evenson, Brian. “McCarthy and the Uses of Philosophy in the Tennessee Novels.” *The Cambridge Companion to Cormac McCarthy*. Ed. Steven Frye. Cambridge: Cambridge UP, 2013. 54-64.
- Faulkner, William. *As I Lay Dying*. Faulkner, *Novels* 1-178.
- . *The Hamlet*. *Novels 1936-1940*: Absalom, Absalom!; The Unvanquished; If I Forget Thee, Jerusalem; The Hamlet. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Library of America, 1990. 727-1075.
- . *The Mansion*. *Novels 1957-1962*: The Town; The Mansion; The Reivers. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Library of America, 1999. 327- 721.
- . *Novels 1930-1935*: As I Lay Dying; Sanctuary; Light in August; Pylon. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Library of America, 1985.
- . “A Rose for Emily.” *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage International, 1995. 119-30.
- . *Sanctuary*. Faulkner, *Novels* 179-398.
- Franco, James, dir. *Child of God*. Perf. Scott Haze, Tim Blake Nelson, and James Franco. 2013. Well Go USA Entertainment, 2014. Blu-ray.
- Frye, Steven. *Understanding Cormac McCarthy*. Columbia: U of South Carolina P, 2009.
- Garner, Dwight. “The Nobel Prize in Literature: A Year for Long Shots?” *New York Times*, 7 Oct. 2014. Web. 20 Jan. 2015.

- Giles, James R. "Discovering Fourthspace in Appalachia: Cormac McCarthy's *Outer Dark* and *Child of God*." Bloom 107-31.
- Giraldi, William. "James Franco's Utterly Misguided Adaptation of Cormac McCarthy." Rev. of *Child of God*, dir. James Franco. *New Republic*, 30 July 2014. Web. 20 Jan. 2015.
- Grammer, John M. "A Thing Against Which Time Will Not Prevail: Pastoral and History in Cormac McCarthy's South." *Perspectives on Cormac McCarthy*. Ed. Edwin T. Arnold and Dianne C. Luce. Rev. ed. Jackson: UP of Mississippi, 1999. 29-44.
- Hage, Erik. *Cormac McCarthy: A Literary Companion*. McFarland Literary Companions 9. Jefferson: McFarland, 2010.
- Hoffman, Jordan. "James Franco Misfires with This Punishing Thriller." Rev. of *Child of God*, dir. James Franco. *Guardian*, 31 July 2014. Web. 20 Jan. 2015.
- Hungerford, Amy. *Postmodern Belief: American Literature and Religion since 1960*. Princeton: Princeton UP, 2010.
- Jewett, Chad M. "Revising the Southern Myth: Persephone Violated in Faulkner's *Sanctuary* and McCarthy's *Child of God*." *Faulkner Journal* 27.1 (2013): 77-95.
- Josyph, Peter. "Tragic Ecstasy: A Conversation about McCarthy's *Blood Meridian*." *Sacred Violence: Cormac McCarthy's Western Novels*. Ed. Wade Hall and Rick Wallach. 2nd ed. El Paso: Texas Western, 2002. 205-21.
- Juge, Carole. "Biography of Cormac McCarthy." *Cremean* 18-25.
- Lincoln, Kenneth. *Cormac McCarthy: American Canticles*. New York: Palgrave Macmillan, 2009.
- Luce, Dianne C. *Reading the World: Cormac McCarthy's Tennessee Period*. Columbia: U of South Carolina P, 2009.
- McCarthy, Cormac. *Child of God*. New York: Vintage International, 1993.
- Shearer-Cremean, Christine. "Through a Trauma Theory Lens: McCarthy's Violence Reconsidered." *Cremean* 50-68.
- Wilson, Charles Reagan, ed. *The New Encyclopedia of Southern Culture*. Vol. 9. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2008.